

大学教職課程における地理歴史科教育法の実践に関する一考察 — 新科目「地理総合」を事例に —

A Study concerning the practice of “Method of Geography and History” in a Teacher-Training Course
- Based on a new subject “Geography” in high-schools -

KEY WORDS

地理歴史科教育法 地理総合 地域教材

佐藤由美

SATO Yumi

杉山比呂之

SUGIYAMA Hiroyuki

【要旨】

新学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」のもと、2022年4月、高等学校地理歴史科には新科目が誕生する。学生たちは高校時代に履修した地歴科科目とは異なる授業を教員として担当することになる。ICTの活用が推進され、授業形態が変わりつつあるなかで、教職課程「地理歴史科教育法」ではどのような準備をすればよいのだろうか。本稿では新科目「地理総合」の「地域の調査と展望」の単元を用い、「生田」を事例に指導計画モデルを作成し、地歴科教員として、①授業の素材を集め内容精査を行う力、②生徒に歩み寄りながら素材を精選し組み立てて行く力が必要であることを示した。

はじめに

令和4（2022）年4月、高等学校の地理歴史科に新科目が誕生する。いずれも2単位の必修科目「地理総合」「歴史総合」と3単位の選択科目「地理探究」「日本史探究」「世界史探究」である。高等学校社会科が地理歴史科と公民科に分離した平成元（1989）年以來の大改編で、約30年間、地歴科の科目であった2単位の「世界史A」「日本史A」「地理A」、4単位の「世界史B」「日本史B」「地理B」は令和3年度以前の入学生の学年進行とともに姿を消すことになる。周知のように、平成30（2018）年3月告示の学習指導要領は、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指しており、既に学校現場ではアイスブレイクやペアワーク、グループワークなどの手法による「アクティブ・ラーニング」が積極的に導入されている。振り返れば、学習指導要領は昭和22（1947）年の「試案」発表以来、経験主義と系統主義の比重を変えながら改訂を重ねてきた。平成21（2009）年の改訂以降はそのバランスが重視され現在に至っているが、生徒主体でありながらも確かな学力を身に付けられる授業、「主体的・対話的」な学習環境のなかでの「深い学び」はどうすれば担保できるのかが喫緊の課題となっている。

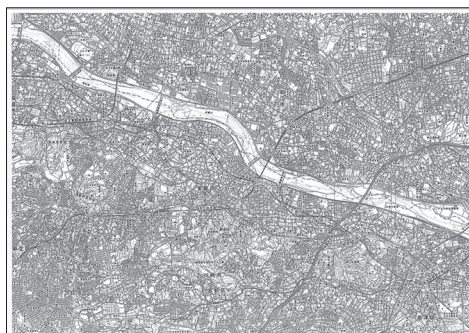
また、令和元（2019）年度末以来、COVID-19の世界的な感染拡大が収束に至らず、学校教育は未曾有の状況に直面し続けている。それぞれの学校種が手探りでオンライン授業を導入し

たところから、GIGAスクール構想が一気に加速しICT教育全般への期待も高まっている。地理歴史科においても電子地図をはじめとしたデジタル教材を、タブレットを用いて学習するといった場面が日常的になることは想像に難くない。教員にはそうした技能も求められる。

このように教育が変わろうとしている時、大学教職課程「地理歴史科教育法」も蚊帳の外では居られない。新科目の教員となる学生にどのような準備が必要かを検討し実践していく必要がある。そこで本稿では、専修大学生田校舎の所在地である「生田」¹⁾を教材にした地歴史の授業づくりを提案する。1で「生田」は教材としてどのような可能性があるのかを検討し、2で実際の単元の指導計画をモデルとして提示する。授業づくりの過程を具体的に示すことで、新科目の学習指導を行ううえで必要な力がより鮮明になると考えたためである。高等学校地歴史の新科目導入を目前にして、大学教職課程の「地理歴史科教育法」の実践を見直すことが本稿の目的である。

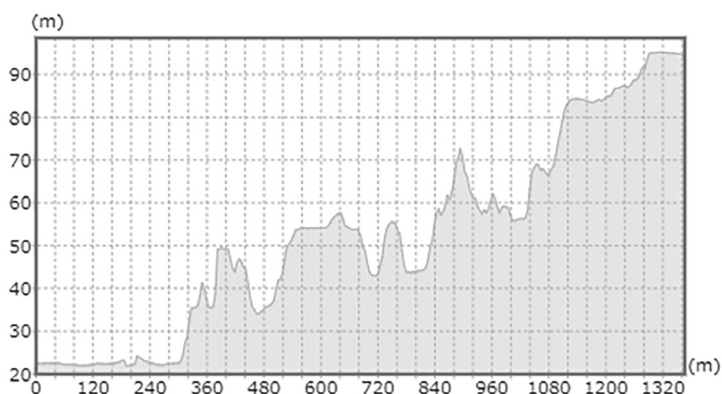
1. 授業の素材探しと「生田」の教材としての可能性

まず、授業構想の準備として、「生田」にはどのような地理的、歴史的素材があるのだろうか。大学図書館や川崎市立多摩区図書館での文献資料調査のほか、「生田」を散策し土地の様子を観察した。〈図1〉は大学に隣接する生田緑地内にある枳形城址の展望台から向ヶ丘遊園駅方面を撮影した景観写真である。多摩丘陵の北東端から多摩川対岸の東京都世田谷区辺りまでの平地を望むことができる。写真手前の木々の緑（生田緑地）と写真奥の向ヶ丘遊園駅から多摩川を挟んで世田谷区にかけての市街地では明らかに高低差があることがわかる。それを地形図（地理院地図利用）で示したのが〈図2〉である。中央の多摩川と丘陵地が平行していることが読み取れる。さらに、向ヶ丘遊園駅を起点に地形図上の三角点（専修大学1号館の辺り）までの高低差（直線距離）を示すと〈図3〉のように可視化できる。地理院地図では「明治期の低湿地」を示すこともでき、丘陵と多摩川の間が正しく低湿地であったことがわかる。



(左) 〈図1〉枳形城址の展望台から向ヶ丘遊園駅方面の景観（2021年3月24日撮影）

(右) 〈図2〉枳形城址から向ヶ丘遊園駅方面の地形図（地理院地図）



＜図3＞向ヶ丘遊園駅と三角点（専修大学1号館付近）の高低差（地理院地図）

丘陵地と市街地に二分されるこの地域はそれぞれにどのような土地利用がされてきたのだろうか、どんな「土地の物語」を紡いできたのだろうか。まずは専修大学生田校舎と生田緑地のある丘陵地からみていこう。『多摩区 OLD & TODAY 川崎市多摩区の歴史』²⁾により人の住んだ軌跡をたどってみると、専修大学生田校舎の北グランド（亀の子山遺跡）³⁾からは縄文時代早期の土器（撚糸文を付けた大丸式の深鉢土器）のほか、縄文時代と奈良時代の3軒の住居跡、奈良時代前半の須恵器、鉞、鎌、墨書土器などが見つまっている（1993：20,24-25,64）。この丘陵には縄文時代から人が住んでいたことの証左となる。柘形四丁目の生田根岸古墳群には7世紀後半から8世紀初頭の豪族のものと思われる五基の古墳がある（1993：54-55）。また、生田緑地には7世紀中頃から後半のものとして推定される「長者穴横穴墓群古墳」があり、中世の山城であった柘形城址がある。柘形城は、鎌倉幕府の御家人稲毛三郎重成の居城といわれるが、その遺構から実際は合戦の際に「陣城」として使用されたと判断されている（1993：76-77）。他の山城（小澤城、作延城、子母口城、井田城）と並んで鎌倉時代から室町時代にかけて「多摩川の見張り番」だったようだ。上掲書では、「多摩川の右岸は多摩丘陵の急崖がせまり、川と丘陵は鎌倉時代以後、軍事的な役割が大であった」、「在地の武士層にとり、多摩川が防衛上重視されたことは事実である」（1993：74-75）と説明している。現在では、かわさき宙と緑の科学館、民家園や岡本太郎美術館など川崎市の文教施設が点在する生田緑地の古（いにしえ）の姿が浮かび上がってくる。また、専修大学生田校舎とは谷（県道13号）を挟んだ向こう尾根の明治大学生田キャンパス内には明治大学平和教育登戸研究所資料館がある。明治大学生田キャンパスは秘密戦兵器を開発していた「登戸研究所」の跡地で、平和教育のために当時の第二科実験棟を資料館として保存し、五つの展示室で登戸研究所の全容、風船爆弾と第一科、秘密兵器と第二科、偽札製造と第三科、敗戦とその後の登戸研究所の展示を行っている。昭和12（1937）年の研究所開設当初は電波兵器を開発する施設であったことから、電波の通信状況のよい丘陵地で、都心からもそう離れていないことが立地条件を満たしたようである。軍の

施設ではあるが「生田村」の現地採用者も多く軍事機密は知らされないままに業務に当たっていたという⁴⁾。専修大学の歴史編修委員会（2009：281）によれば、専修大学生田校舎はNECの研究所の跡地である。

一方、丘陵下に目をやると、小田急線向ヶ丘遊園駅から登戸駅にかけて東西に開けた市街地が展開する。北の多摩川、南の多摩丘陵に挟まれ、明治時代には低湿地帯であったこの地域には多摩川の支流が流れる。向ヶ丘遊園駅近くには五反田川と二ヶ領本川との合流点もあり、多摩川との関係の深さは今も変わらない。この土地が宅地として発展するのは1927（昭和2）年に小田急線が開通し、このエリアに稲田多摩川駅（現在の登戸駅）と稲田登戸駅（現在の向ヶ丘遊園駅）の二つの駅が誕生してからであろう。1927年に小田原急行鉄道株式会社が発行した吉田初三郎「小田原急行鉄道沿線名所図絵」⁵⁾には「向ヶ丘遊園地」の文字と遊園地の絵が描かれている。1930年の「南部鉄道沿線案内図」⁶⁾にも向ヶ丘遊園と柘形山が丸抜きで大きめに描かれている。向ヶ丘遊園と柘形山は小田急線沿線の名所として昭和初期からインパクトの強い存在であったことがわかる。向ヶ丘遊園駅は南口、北口ともにレトロモダンな駅舎が残っている。向ヶ丘遊園は2002年に閉園したため遊園地としては存在しないのだが、駅名として残っているのはなぜなのか。そもそもなぜ向ヶ丘遊園は閉園したのだろうか。広大な跡地（生田緑地の東側、長尾二丁目）はどうなっているのだろうかといった疑問が次々に浮かぶ。これらの疑問の解決には永江雅和の研究（2008, 2011, 2016）が大変参考になる。再開発は向ヶ丘遊園跡地だけではない。2021年現在、向ヶ丘遊園駅北西側では登戸1号線の工事や区役所通り登栄会商店街のまちづくり検討会を中心とした新しいまちづくりが進行中⁷⁾である。

さて、この地域には多摩川の支流が流れていると述べたが、2019年10月12日～13日の東日本台風（台風19号）では多摩川が氾濫し兩岸の市区町村に被害をもたらした。本稿が対象とする地域でも住居の半壊が1軒あった。川崎市のハザードマップのうち、「洪水浸水想定区域（多摩川水系）」、「浸水継続時間（多摩川水系）」をみると、二ヶ領本川を含む多摩川から多摩丘陵までの間は浸水想定区域となっており、想定の高さも50cmから3mに及ぶことが示されている。浸水継続時間は12時間未満と予想されている。一方、「多摩区土砂災害ハザードマップ」をみると、丘陵地には土砂災害警戒区域が含まれていることがわかる。地域の地形は自然災害と無関係ではないため、その特徴をよく把握しておくことが緊要である。ここまで、授業で取り上げたい「生田」の地理的、歴史的素材を挙げてみた。以下では一つの授業の型を提案する。

2. 「地理総合」の授業計画 - 地域の調査と展望 -

本授業計画は専修大学附属高等学校の「総合的な探究の時間」⁸⁾における試験的な実践を踏まえて提案するものである。新科目の「地理総合」並びに「歴史総合」を見据えて計画したものであったが、「生田」地域の歴史的な素材は地誌のなかに位置づけ、ここでは「地理総合」

の授業として提案する。

地理教育の実践者である小田切（2021:50）は、「生徒の興味関心を引き出す方法としては、教科の内容を今（ニュースやできごと）に繋ぐ方法や、ここ（地域）に繋ぐ方法がある。なかでも、生徒の生活の舞台である学校周辺地域の様子を教材化することが、地理ならではの役割である」と述べており、学校周辺の地域の教材化に一定の価値を認めている。また、原田（2019:25）は新学習指導要領の大項目「C持続可能な地域づくりと私たち」のなかの中項目「生活圏の調査と地域の展望」について、「地理的な課題の解決に向けた取組や探究する手法などを捉えるばかりでなく、学習者との関わりから、生活圏で解決しなければいけないテーマを設定し、その課題の要因や解決策を考察し、その上で議論などを通して地域の展望を構想する。構想が明確に位置付けられた地理総合の集大成となっている」と述べている。こうした先行研究の指摘も踏まえたうえで、本単元では、生活圏を「生田」と設定し、向ヶ丘遊園駅から専修大学生田校舎までの地域とその周辺を調査活動の範囲とした。また、ICT教育の一環として、地理院地図の利用やGoogleスライド、Googleフォームの活用にも留意した。

《単元名》「生田」はどのような土地なのか？ - 「生田」地域の調査と展望-

《単元の目標》

「生田」について地理的・歴史的な観点から諸事象を把握したうえで、課題を発見し、その解決に向けたさまざまな立場からの取り組みや探究方法などを理解する。そのうえで、「生田」を題材とした主題を設定し、主体的に考察・表現したうえで、相互に的確に評価する。

《単元の評価規準》 省略

《単元の学習指導計画》

時 限	学習課題	●学習活動 ※指導方法・留意点	評価の観点		
			知 技	思 判 表	態
1	「生田」を知ろう！ （地理的アプローチ） <提示する教材> ・ 景観写真 ・ 地理院地図 （2万5千分の1地形図 ／高低差等） ・ 鉄道地図 ・ 台風19号の映像	《導入》 ● 向ヶ丘遊園駅周辺と専修大学生田校舎までの教員自撮り動画上映 《展開》 ● 景観写真、地理院地図・Googleマップ等を用いて生田の地形的な特色を把握する。 ● 向ヶ丘遊園駅と小田急線、専修大学生田校舎・生田緑地・生田の防災などのトピックから土地利用の様子を把握する。 《まとめ》 ● ペアで生田の地形的な特色をシェアする。	○		

	<p>・ハザードマップ</p>	<p>※KP法を活用した対話型講義で進める。</p> <p>※標高差・多摩川流域・多摩丘陵の北東・土地利用の様子（鉄道・幹線道路と住宅地／文教施設と丘陵地）・多摩川を挟んで分かれる地名（宇奈根・押立）などに注目させる。</p>			
2	<p>「生田」を知ろう！ （歴史的アプローチ） ＜提示する教材＞</p> <p>・『亀の子山遺跡－専修大学校地発掘調査報告書－』</p> <p>・『多摩区OLD & TODAY 川崎市多摩区の歴史』（部分）</p> <p>・「明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック」</p> <p>・川崎民家園、岡本太郎美術館、藤子不二雄ミュージアム等のHP</p>	<p>《導入》</p> <p>●専修大学敷地内にある亀の子山遺跡の紹介</p> <p>《展開》</p> <p>●生田長者穴横穴墓群、枳形城址の景観写真や文字資料から歴史的にみた土地利用の様子を把握する。</p> <p>●第二次世界大戦時に近接地域に設置された陸軍登戸研究所と地域との関係について資料館のHPや資料をもとに把握する。</p> <p>●生田緑地に点在する文教施設についてHPや文献資料により把握する。</p> <p>《まとめ》</p> <p>●ペアで生田の歴史的な土地利用の様子をシェアする。</p> <p>※KP法を活用した対話型講義で進める。</p> <p>※丘陵地には縄文期の遺構がある一方、弥生時代の遺構が見当たらないのはなぜか、枳形城や陸軍登戸研究所はなぜ高台に築かれたのかなどを問いかけ生徒の思考に働きかける。</p>	○		○
3	<p>「生田」を深めよう！ （調査活動）</p> <p>＜テーマの例＞</p> <p>・ドラえもんはなぜここに？（藤子不二雄ミュージアムが地域にもたらしたもの）</p> <p>・向ヶ丘遊園はどこに？（歴史と跡地をめぐる議論）</p> <p>・戦争と「生田」（旧陸軍登戸研究所と地域）</p> <p>・台風などの自然災害、地域に危険な場所はあるか？</p> <p>・生田はどう変わっていくの？（向ヶ丘遊園駅周辺の再開発）</p>	<p>《導入》</p> <p>●調査方法やツールの紹介</p> <p>・ICTを活用した調査（多摩区役所HP／各施設のHP／地理院地図／Googleマップ等）</p> <p>・フィールドワーク　・聞き取り調査</p> <p>・多摩区図書館の郷土史コーナーの利用</p> <p>・大学図書館や博物館等での先行研究の利用</p> <p>《展開》</p> <p>●チームごとにテーマを決め、調査活動を開始する。</p> <p>《まとめ》</p> <p>●チームごとに調査で得たことを共有し、次時の調査活動の計画を立てる。</p> <p>※調査活動では安易なインターネット検索に終わらないようチームの活動状況を観察し有効な資料やツールの紹介を随時行う。フィールドワークや聞き取り調査は映像や記録を利用することも考えられる。</p> <p>※「深い学び」となるテーマの選定も重要である。地域との関係がどうなっているのか、テーマを深められるような支援を行う。</p>	○		○ ○

4	「生田」を深めよう！ (調査活動)	<p>《導入》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●前時の調査活動における問題点の提示 <p>《展開》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●チームごとに調査活動を継続する。 ●調査結果をスライド（8～10枚程度）にまとめる。 <p>《まとめ》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●チームごとに進捗状況を確認し発表に備える。 <p>※適切な机間指導・支援を行う。その際、生徒の気づきを促す質問を心がける。</p>	○		○
5	「生田」を楽しもう！ (表現活動)	<p>《導入》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●発表のルールについて確認する。 ・5時限目終了時まで全チームがスライドをGoogle Classroom上に提出する。 ・各チームの持ち時間は最大5分とする。 <p>《展開》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●スライドを完成する。 ●発表準備を行う。 <p>《まとめ》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●チーム内で発表に向けた役割分担等を話し合う。 <p>※スライドに不備がないかを確認する。文字の大きさ、文字の見やすさ、1枚のスライドの情報量などを確認させる。</p>		○	○
6	「生田」を楽しもう！ (表現活動)	<p>《導入》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●発表のルールについて再確認する。 <p>《展開》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●チームごとに発表を行う。 ●相互評価（Google フォーム）を行う。 <p>《まとめ》</p> <ul style="list-style-type: none"> ●全体の総括を行う。他のチームの発表を聞いたうえで、「生田」はどのような土地なのか、紹介文を作成する。（次時に提出） <p>※表現活動は発表だけにとどまらない。他のチームの発表を聞いて、生田はどのような土地なのか、どのような課題があり、どのような方向に進んでいこうとしているのかを総合的にまとめさせる。</p>		○	○

以上のように、ICTの活用を念頭に入れつつ、地域の教材化をはかる授業計画を立案した。1、2時間目は「生田」を知る時間になっている。教員が集めた素材のうち、調査活動の動機づけとなるような景観写真や地図、遺跡等を提示しながら授業を進める。講義形式にはなるが、生

徒との対話を重視しながら興味、関心を引き出すように進めていく。3、4時間目は調査活動になっている。ここでは生徒の主体的・対話的な活動が展開されるが、これを「深い学び」まで引き上げるのが教員の役割となる。テーマの設定や調査資料は適切かを見極め、躓いている生徒を支援しなければならない。5、6時間目は表現活動になっている。発表して終わりではなく、調査活動の結果を理解し、使える知識とするためには「聞く力」や自分の言葉で「構成する力」も必要となる。年間の授業時数も限られていることから、探究する価値のある課題と調査活動が深まる資料を教員が準備しておくことが肝要である。

また、本実践をさらに有益なものにするためには、各学校や各地域に応じて、①主体的・対話的で深い学びを促すための教育手法の活用、②外部人材の活用の二つの観点からさらなる工夫ができる。①については、前述した単元の学習指導計画中にあるKP法以外にも(知識構成型)ジグソー法、VTS (Visual Thinking Strategy) 等の手法を杉山 (2021: 138) が紹介しており、状況に応じて用いれば、さらに生徒の主体性を育む実践となる。②においては新学習指導要領において「社会に開かれた教育課程」の実現が目指される中で、大学生を高校生のメンターとして活用したり、行政職員や博物館学芸員、郷土史家などの専門家を招聘しての講義・調査活動が行える。このように課題や改善点を残しつつも、今後の「地理総合」の実践に一つの型を示すことができたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、大学教職課程の「地理歴史科教育法」の実践を見直すことを目的とし、「生田」を教材に地理と歴史を総合的に捉えた授業づくりを提案した。そのうえで、最後に地理歴史科の教員を目指す学生の育成について、自戒の意味も込めていくつか提言をしたい。

地理歴史科の授業においては、「①授業の素材を集め内容精査を行う力」「②生徒に歩み寄りながら素材を精選し組み立てて行く力」の両方が求められる。料理で例えるならば、「食材を集める力 (①)」と「食材を調理し配膳する力 (②)」である。文部科学省の「主体的・対話的で深い学び」や「GIGAスクール構想」、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」などにより、現代の教員に求められるスキルとマインドは大きく変化してきている。そのような中、教材を集めることが目的となってしまう、それらを最適なカタチで目の前の生徒に提供できない場合や、ICT活用が目的となってしまう、プレゼンスキルは目を見張るものがあるもののコンテンツが物足りない場合がある。つまり、①②の両方の力をバランスよく身に付け、目の前の生徒に即した授業を実践できる教員を目指すことが重要である。そのために、教員自身がまさに「主体的・対話的で深い学び」ができなければ、本来の意味での授業実践は難しい。もちろん、深い学びの実現は容易なことではないが、教員として探究心を忘れずに、研究と実践の両輪で、大学の教職課程と学校現場が連携をして、新たな実践、新たな教員養成の在り方を模索していくことが重要である。

本稿の「生田」という一つの地域を題材にした授業実践で言えば、①「生田」を教材化する専門家としての役割を担う、②意義や価値のある調査・チーム活動ができるようにファシリテートする役割を担う、③外部人材と協働して研究・実践するコーディネーターの役割を担うことが教員に求められることとなろう。つまり、教員はティーチャー・ファシリテーター・コーディネーターの役割を果たすことが求められている。このように教員に求められる役割が多種・多様化していることを認識しながら、大学での教職課程はもちろん、学校現場での次世代の教員養成はまさに転換点を迎えているといえるだろう。次世代の意欲あふれる教員志望者を育成し、学校現場において持続可能な活躍ができるような実践が必要不可欠である。

(さとう・ゆみ 専修大学商学部教授)

(すぎやま・ひろゆき 専修大学附属高等学校教諭／専修大学経済学部兼任講師)

<付記>

専修大学附属高等学校での授業実践では同校講師の小澤拓海氏、メンターの栗原瑞季さん(専修大学学生)にもご協力いただいた。ここに記して謝意を捧げたい。

<注>

- 1) 本稿で用いる「生田」とは向ヶ丘遊園駅から専修大学生田校舎、生田緑地を中心としたエリアで、川崎市多摩区東三田二丁目、柘形五丁目、柘形六丁目、柘形七丁目とその周辺を指す。
- 2) 「多摩区地域史」編集委員会編『多摩区 OLD & TODAY 川崎市多摩区の歴史』(多摩区役所, 1993年, 全390頁)は、管見の限り多摩区を中心とした唯一の地域史である。
- 3) 亀の子山遺跡については、専修大学『亀の子山遺跡－専修大学校地発掘調査報告書－』1986年がある。
- 4) 明治大学平和教育登戸研究所資料館「明治大学平和教育登戸研究所資料館ガイドブック」(2019年3月第5版, 全30頁)参照、及び同資料館見学(2021年4月22日)。
- 5) 所蔵は横浜都市発展記念館。岡田直監修『地図で読み解く小田急沿線』, 三才ブックス, 2020年, pp.28-33を利用。
- 6) 所蔵は横浜都市発展記念館。岡田直監修上掲書p.67「南部鉄道沿線案内図」(部分)を利用。この地図は『多摩区 OLD & TODAY 川崎市多摩区の歴史』の表紙にもなっている。
- 7) 再開発の進捗状況は、川崎市登戸区画整理事務所の広報紙「登戸まちづくり」で確認することができる。
- 8) 専修大学附属高等学校(東京都杉並区)では第3学年に「総合的な探究の時間」を配置し、毎週水曜日の5・6時間目に授業担当者ごとに講座名の異なる複数クラスで同時開講している。本実践は杉山他が担当する「昔の東京講座」の授業枠を利用し、2021年6月2日、

9日、16日の合計3日、6時間で行った。折しもコロナ禍の感染症対策のため、短縮40分授業、グループワーク・ペアワークの制限、フィールドワークの実施不可などの制約のなかでの実践となった。

<引用文献一覧>

泉瑠維・小西恵美・齊藤佳史・永江雅和・永島剛「聞き取り「川崎市向ヶ丘遊園の跡地保全を巡る市民運動－藤子・F・不二雄ミュージアム設立前史－」『専修大学社会科学研究所月報』No.579 2011年 pp.1-34

小田切俊幸「地域の教材化 生徒の興味関心を引き出す仕掛け」林仁大ほか『アクティブ・ラーニング実践集 地理』山川出版社 2021年 p.50

専修大学の歴史編修委員会編『専修大学の歴史』平凡社 2009年

川崎市多摩区06tamasin.pdf (city.kawasaki.jp) (閲覧日2021年5月20日)

川崎市多摩区06tamakei.pdf (city.kawasaki.jp) (閲覧日2021年5月20日)

川崎市多摩区tama.pdf (city.kawasaki.jp) (閲覧日2021年5月20日)

「多摩区地域史」編集委員会編『多摩区 OLD & TODAY 川崎市多摩区の歴史』多摩区役所 1993年

杉山比呂之「歴史総合の実践1－箱根駅伝と五大法律専門学校－」中平一義ほか『中等社会系教科教育研究：社会科・地理歴史科・公民科』風間書房 2021年 pp.135-142

永江雅和「向ヶ丘遊園の経営史－電鉄会社付帯事業としての遊園地業－」『専修大学社会科学年報』第42号 2008年 pp.165-181

永江雅和『小田急沿線の近現代史』クロスカルチャー出版 2016年（第六章 生田村騒動と向ヶ丘遊園 pp.65-78）

原田智仁『平成30年版 学習指導要領改訂のポイント』明治図書出版 2019年